

古き良き鉄道の歴史を伝える遺構

鉄道の歴史を伝える 日本最古のランプ小屋

北陸新幹線が開業した敦賀は古くから鉄道と港の街として栄え、その歴史を伝える遺構の一つが、現存最古級の鉄道建築物「旧敦賀港駅ランプ小屋」です。日本海側で初めて鉄道が開通した明治15年（1882年）に金ヶ崎停車場（後に敦賀港駅に改称）の付属施設として建設されました。当時の鉄道は機関車や線路脇の信号に石油ランプを使

用していました。ランプ小屋はこれらの石油ランプや燃料を保管・整備するためのもので、安全な鉄道運行には欠かせない存在でした。かつては主要な駅に存在しましたが、光源が電灯に変わるなどして、その用途が消滅すると、次第にその姿を消していきました。

煉瓦に刻まれた 職人の手仕事の証

敦賀では鉄道で石油ランプが使われなくなつてからも機械油などの倉庫として使われていましたが、平成26年（2014年）2月に日本貨物鉄道株式会社から敦賀市に寄贈。市が修復を施し、一般公開しています。

修復にあたつての調査では、第二次世界大戦の焼夷弾による焼け跡が見つかったり、建物の周囲が最大80センチも土に埋もれていたことが判明したりと、かつての姿を伝える数々の痕跡にも注目が集まりました。

建物は耐火性の煉瓦造り平屋建てで、外壁はイギリス積みと呼ばれる手法で煉瓦が積まれています。特徴的なのが煉瓦に記された煉瓦職人の刻印です。煉瓦づくりを担った複数の職人が、自分たちの仕事を区別するために刻印したと考えられています。当時は煉瓦を焼く技術が安定しておらず、焼き色にムラがありますが、それが外観のアクセントにもなっています。

当時の石油ランプを復元し、 ゆらめく灯火で往時を偲ぶ

当時の蒸気機関車の石油ランプを復元したのも展示されています。その頃の鉄道車両はイギリスの会社が製造しており、会社ごとにランプ等の付属品の形が微妙に異なっています。敦賀では1290型の肩丸形ランプと1800型の箱形ランプが使われていたと考えられており、これらを資料に基づき忠実に復元。ゆらめくような灯火が当時の雰囲気を与えています。

【旧敦賀港駅ランプ小屋】

- 公開時間 午前9時から午後5時まで
- 休館日 毎週水曜日・年末年始

● この記事に関するお問い合わせ
敦賀市文化振興課

0770-122-18152



明治40年頃のランプ小屋周辺の写真。海のすぐ側まで鉄道が走っていたことがわかります。
（『越山若水』敦賀市教育委員会蔵）



修復工事で屋根は瓦葺きに復元されました。外観の煉瓦は、よく見ると右の写真のような刻印が確認できます。刻印は「又」「市」「石」など数十種あり、珍しく貴重なものです。



当時、敦賀を走った蒸気機関車に使われていたと考えられる石油ランプを復元して展示。